

特別対談

日本人が「新しい知」を生む時代へ

本当のリベラルアーツとは、いま必要な大学改革とは、「ファスト教養」にどう向き合うか——。
女性学研究的パイオニアと大学学長を務める神学者が初対談

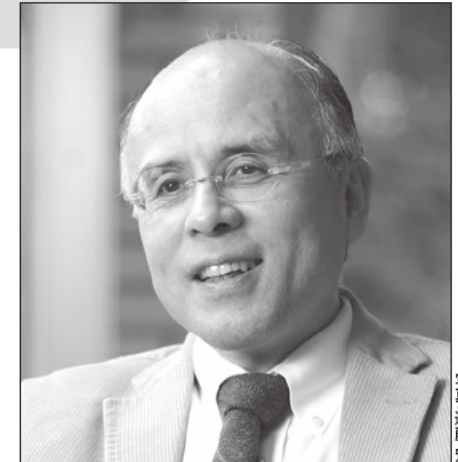


写真：後藤さくら

うえのちづこ
上野千鶴子

(東京大学名誉教授／社会学者)

1948年、富山県生まれ。京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程退学。東京大学で博士(社会学)学位授与。日本の女性学、ジェンダー研究のパイオニア。認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長。著書に『近代家族の成立と終焉』(岩波書店)、『おひとりさまの最期』、『女ざらい ニッポンのミソジニー』(朝日新聞出版)、『最期まで在宅おひとりさまで機嫌よく』(中央公論新社)など多数。



写真：遠藤宏

もりもと
森本あんり

(東京女子大学学長)

1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学人文科学科卒業。東京神学大学大学院を経て、プリンストン神学大学院博士課程修了(Ph.D)。専攻は組織神学。プリンストン神学大学客員教授、バークレー連合神学大学客員教授、国際基督教大学教授などを経て、2022年4月より現職。著書に『反知性主義』『不寛容論』(いずれも新潮選書)、『異端の時代』(岩波新書)など。

結婚生活の持続に必要なものとは？

森本 上野先生は、私がかねてより尊敬する、数少ない方の一人です。『朝日新聞』での人生相談企画「悩みのるつぼ」も、いつも興味深く拝見しています。

上野 まあ、ありがとうございます。私の元には「下ネタ」や際物の相談がよく寄せられます(笑)。

森本 よく存じ上げています(笑)。

上野 今回の対談テーマは「本当の教養やリベラルアーツ」ですが、あえて身近な話から始めるのも面白いかもしれません(笑)。

先ほどご紹介くださった『朝日新聞』の人生相談では、四十代の既婚女性から寄せられた「風俗に通う夫が嫌でたまらない」という投稿が、最近ではとくに印象に残りました(『朝日新聞』二〇二二年十月一日朝刊)。私が着目したのは、相談者が夫を「気持ち悪い」と表現していたこと。これは身体感覚を指す表現で、もはや倫理

や道徳ではどうにもならないですよ。心はだませてもカラダはだませません。そんなキモチ悪い相手とこれからも家族を続けますか？」と答えました。

森本 その回答、よく覚えています。私と一緒に読んでいた妻も、先生の回答に唖っていましたよ。

上野 森本さんならどうお答えになるのか、ぜひお聞きしたいわ。

森本 いやいや、そんな……。私は本誌で「人生の道しるべ」という人生相談企画を一年間担当したことがあります(『Voice』二〇二一年九月号〜二〇二二年八月号)、毎回、回答にとっても苦労したものです。

ストレートにお答えしにくい質問ですが、幸せを持続的に保つには、性の充足が重要な要素だと思います。前に女性の学生から「結婚したいほど好きな男性がゲイなのですが、どうしたらいいですか」と相談されたことがあります。もちろん、パートナーとして一緒に暮らしていく人生はありうるし、いわゆる「偽装結婚」は歴史的にもありました。ただし、女性として求められないまま

結婚生活を続けていくこと、あるいは互いが別の場所で性の充足を求めるような関係は、持続可能にならないくいのではないか。私は彼女にそう答えました。

上野 ヘテロセクシャル（異性愛者）の女性とゲイの男性のあいだで友情が成り立つケースは珍しくないですよ。

森本 もちろん友情はあります。ただ、「結婚したい」と言われたら、その関係はどうなるでしょうか。

上野 結婚をたんなる社会契約だと思えばよいのではないでしょうか。

森本 うーん、私は、結婚にまつわるロマンチズムがすべて社会的に構成されたものとは思わないのです。男女という組み合わせだけでは限りませんが、性も含めてお互いが全人格的に満たされるほうが、二人の関係は幸いで持続的だろうと考えてしまいます。

上野 理想はね。でも世の中には、出産してからずっとセックスレスの夫婦は数えきれないほどいるんですよ。

択肢がない場合も含まれるのだけれど、情性ではなくて折に触れて選び直しをしてきた夫婦が結果として持続するのでしょう。

森本 なるほど、再選択の繰り返しですか。多くの夫婦が思い当たる言葉のように思います。

未知の問いを立ててノイズを起こす

上野 そろそろ本題に入りましょうか。ただし最初に断っておくと、私は森本さんと藤原正彦さん（お茶の水女子大学名誉教授）の対談（『Voice』二〇二二年七月号『国語と教養』を軽視する愚かさ）のような格調の高い話ではありませんよ（笑）。

森本 とんでもない。私は藤原先生との対談のなかで、「得られた知識でその人自身が変わり、ものの見方や考え方が変わるところにこそ、リベラルアーツの本義がある」と申し上げました。

また、本当のリベラルアーツはいつも反時代的で、社

森本 ええ。ですが、出産後とかではなく、結婚前から性関係がないことを前提に、良好な婚姻関係を築いていけるでしょうか。

上野 いまでは、セックスを一度もしないままに結婚する夫婦はほとんどいないでしょう。いずれにせよ、最近には性に関する世間の風潮が変わってきていると実感させられます。ポリアモリー（関係者全員の合意を得たうえで、複数の人と恋愛関係を結ぶ恋愛スタイル）を公言する人も出てきました。

森本 性に関する多様性は間違いなく広がっていくでしょう。私は男女の結婚制度を絶対視するわけではないし、LGBTQの自由な選択も尊重され公認されるべきだという意見です。そのうえで、持続的な幸せを得られる可能性でいえば、排他的関係をもたないポリアモリーはあまり高くはないという考えです。

上野 私がつくづく感じるのは、長続きしているカッブルほど、人生の節目で何度か夫婦関係の「再選択」をしているということです。そのなかには、たんに別の選

会への挑戦だと考えています。欧米では十九世紀の終わりごろから、知と富が結びついて専門性の高い大学・大学院が次々に創設されました。しかし二十世紀の二度の大戦を経て、過度な専門主義や科学偏重主義の限界が露呈し、人間性の根本に立ち返る意味でリベラルアーツが復権した。つまり、リベラルアーツとは本来、国の政策によって大学を動かすことへの原理的な反発なのです。この点について、上野先生はどうお考えですか。

上野 「反時代的」や「社会への挑戦」というお言葉どおり、リベラルアーツや教養とは、まさしく批判的知性を育てるものです。哲学者の加藤周一さんは、批判的知性の向かう先はまず第一に「自己批判」だとおっしゃいました。

そのためには、誰も考えたことのない問いを立てて、ノイズ（雑音）を起こすことが求められます。とくに私が研究してきた社会学は、「常識の関節外し技」と言われるほど常識を疑ってきました。また「ユダヤ人の学問」といわれるほど、周辺から社会を相対化して見る営

みでもあります。その意味で社会学は、リベラルアーツの原点のような学問なのかもしれません。

森本 上野先生は東京大学で教えておられましたから、学問の権威と自由、知性主義と反知性主義、その両方を実感してこれたのではないのでしょうか。

上野 戦後の日本で、全国の大学で創設された教養学部は、一時の大学改革によって解体の危機に陥りました。東大もその例外ではありませんでしたが、結果的に教養学部が守り抜かれたのは、蓮實重彦さんはすみ しげひこのおかげです。蓮實さんは東大の教養学部長から初めて総長に就任された方で、リベラルアーツの重要性を真に理解されていました。ところが最近、日本の大学全体が実学中心の専門学校化の方向に向かっていく気がしてなりません。

森本 政界や経済界を中心に「カネを生まない学問は意味がない」という風潮があるからでしょう。先日、ある官僚の方と話したときに、「人文社会学系の大学院に進学したって、大して給料が上がらないでしょう。それなのに行く理由がわからない」と口にされていて愕然がくぜんと

そ、その国の文化の達成度を示すものです。理系分野を増やせば国民が幸せになるという発想自体、エビデンスもないし、あまりにも安直でしょう。

上野 そうですね。私は、理系Ⅱ実学、文系Ⅱ虚学とは必ずしも捉えていません。たしかに工学系の分野は実利的でしょうが、それこそ藤原正彦さんのご専門である数学なんて、限りなく哲学に近い学問ですよ。

森本 藤原先生自身、数学で問題を解くのに必要なのは美的感覚や情緒力だとおっしゃっていました。

上野 理系分野の先生方と話していつも感じるのが、基礎理論・基礎研究に研究費がなかなか出ないことへの強い危機感です。短期的に成果が上がる分野にばかりお金が投入されてしまうのです。

学者が研究するモチベーションの根拠は何か。それは「面白い。知りたい」という好奇心に尽きるでしょう。そうした人間を突き動かす基礎的な研究にこそ、半世紀後に人びとのためになるかもしれない可能性が秘められていることを、私たちは思い返すべきです。

しました。その方にとっては、学問を修めるのは給料を上げるためではない、という認識なのです。

上野 そういう方が国の政策を担にっていることが恐ろしい。教育を人的資本形成だと捉え、収益を生み出すことしか頭にないのでしょうか。そんな人たちに国の舵取りかじどりをさせてしまつては、再び教養学部や文学部の解体論にもつながりかねません。

森本 岸田文雄首相が自ら議長を務める教育未来創造会議は、理系分野を専攻する大学生の割合を、二〇三二年ごろまでに現在の三五％から五〇％に増やす目標を掲かげています。イギリスやドイツなどの先進国は四〇％を超えているため、それらの国々に追いつき追い越せなのでしょう。しかし政府が推進する施策は、明治時代の殖産興業的な発想そのものではないでしょうか。

私が学生時代にネパールに赴おもむいたとき感じたことです。私が発展途上国の大学にあるのは理系・実学ばかりです。だとすれば、当時のネパールは世界でもっとも進んだ国だったことになるでしょう。人文社会科学の充実こ

日本の大学は「メタ知識」を生み出せていない

森本 上野先生といえば、二〇一九年度の東京大学入学式での祝辞が話題を呼びましたよね。知の創造性や多様性の価値など、これから学問に向き合う学生たちにふさわしいお話だと、私も感銘かんめいを受けました。

上野 ありがとうございます。スピーチでは、まだ見たことのない知を生み出すための知を「メタ知識」と呼ぼうと訴えたのですが、じつは私自身、この名称がいまだにしっくりきていないですよ（笑）。心理学には「メタ認知」という概念がありますが、それとは違います。

森本 「メタ知識」とは、既存の知識の枠組みを飛び越える一段高次元の知のことですよ。

上野 ええ。かといって、ノウハウやスキルといった言葉を使うと、どこか軽く聞こえてしまいますし。

森本 存在しないものにあえて名前をつけようと試み

る上野先生の姿勢は、研究者の原点だと思います。

上野 あのスピーチをしたあとに東大法学部三年の学生が私のところにやって来て、「先生は高等教育の役割は『メタ知識』を身につけることとおっしゃいましたが、いま僕らの受けている教育が、そんな教育とは思えません」と言ってきたんです。

森本 何とも率直な訴えではないですか（笑）。

上野 私は彼にこう返しました。「はい、そのとおりです」と（笑）。残念ながらいまの高等教育は、「メタ知識」を身に付ける役割を果たしているとは思えません。

森本 わたしは哲学や神学という古い学問系なので、大学教育で新たな知を創造するのは、簡単ではないと思っています。じつのところ、ほとんどの学生は既存の知を一所懸命に学んで耕すこと^{たがや}で、新しいように見える薄い一枚の皮をつくるのがやっとでしょう。

上野 おっしゃることはよくわかります。が、現実の変化が学問を追い抜いていきます。そんな状況のなか、いかにして新たな知を生み出すか。情報工学には「情報

とはノイズが転化したものである」という命題がありますが、私はこの言葉がとても腑^ふに落ちました。ノイズなきところに情報は生まれません。ではノイズはどこで発生するかといえば、システム間の落差から発生します。ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンは、「システムとはノイズの縮減装置」だといいます。

森本 ノイズが小さくなったほうが、スムーズで考える必要がなくなりますからね。

上野 ええ。言い換えればシステムとは、物事をルーティン化することでノイズの発生を抑制する装置なのです。裏を返せば、システムにどっぷり浸^{ひた}かっていたらノイズが生まれず、情報はつくられないし、知の創造もありません。その意味では、既存の社会に疑問を呈し続けてきた社会学者は、ノイズ・メーカーだといえるかもしれません。

森本 なるほど。リベラルアーツにふさわしいお話です。じつは神学という学問も同じなのです。中世の大学は教会と深い関係にありましたが、神学は教会や教義を

批判的に論ずるので、教会は大学を危険視していたのです。そういう緊張があつてこそ、学問が進みます。

上野 批判や対立もノイズの一種ですね。

森本 ノイズを生むためには、まずは小さなシステムがあちこちに存在する事実に気づかないといけません。教育もある種のシステム化で、誰もがそのなかでその人なりの知性と偏見が育てられていくわけです。そこで終わらずに、自分が触れてきたものとは別のシステムに積極的に接することができれば、ノイズが生じて、そこから新しい知が生まれるかもしれない。

上野 おっしゃるとおりです。国家だってじつは、狭くて小さなシステムの一つともいえます。だから複数の言語を学び、他国の文化を知ることがとても大事なんです。ところが最近のアメリカの大学では、英語以外の外国語教育が軽視されているのか、モノリンガル（単一言語習得者）化していると耳にします。

森本 英語が多くの国で通じるからか、アメリカ人はもともと他言語を学ぼうとしない傾向にあります。日ご

ろから異なる言語に触れていないと、いずれは英語力すら衰退してしまうかもしれないと言いたいですね。

上野 母国語以外を学ばないと、自分たちの言語を相対化できませんし、新しい知も生まれませんからね。逆にいえば、日本のような言語小国民は必然的に多様な言語を学ぶ必要に迫られるため、これからの時代には好機^{めづ}が巡^{めぐ}ってきているように思います。

森本 日本が世界で戦うには、否^{いや}応^{おう}なしにバイリンガル（二言語習得者）にならないといけませんからね。

上野 そうなんです。アメリカのモノリンガル化は、日本がグローバルに渡り合ううえでの絶好のチャンスだと感じました。

大学入試の推薦枠を拡大すべき

上野 日本の高等教育にリベラルアーツが根づかない背景には、大学の選抜方式も関係しているでしょう。現在の入学試験のように、一つの正解が決まっている問題

の正答率を競うやり方では、「クイズ王」のような人材ばかりが集まってしまいますよ。

森本 同感です。でも当の東大は、いまの入試選抜制度を大きく変えることはないのではないのでしょうか。市民社会の公益よりも、あくまでエリートを輩出するという自分だけの役割を重視している気がします。

上野 公益というより、国益優先ですね。

森本 上野先生は東大の入試選抜制度をどのように変革すべきとお考えですか。

上野 現在の東大入試の総定員は約三〇〇〇人なのですが、そのなかで推薦枠は全体の約三％の一〇〇人程度にとどまります。私はいつそのこと、推薦枠を一〇〇〇人程度、すなわち総定員の三分の一ほどに大胆に拡大するべきだと考えています。東大一般人試の女性の割合は二割に満たない一方で、推薦入試では四割を超えています。つまり、推薦入試の枠を増やせば、女子学生の割合も自ずと増すわけです。

森本 たんに女性の割合を増やすと訴えると、アフア

フォルニア大学」は公立校なので社会と契約関係にあり、公益をめざしているからこそ、多様性のある入試制度への大幅な変更が可能だということです。

上野 公益を体現しているとは素晴らしいですね。日本でも入試の段階で、偏差値よりも伸びしろのある子を選抜するべきです。

森本 そう考えると、次に必要になるのが、伸びしろのある学生を見極める制度変更です。入学後に伸びそうな学生を、入学前にどうやって見つけ出すか。

上野 フランスのように入試問題で、受験者に長い論文を書かせてはどうでしょうか。答えの出ない哲学的な問いを与えて、どんな本を読んでも構わないから何日以内に完成させなさい、と出題するのです。伸びしろのある学生であれば、たとえ論理や表現が稚拙ちせつだとしても、教員が「おっ！」と思う斬新な発想のレポートを書き上げるはずです。私の経験上、東大生は全体としてどの課題もそつなくこなす適応力がありますが、教員側の想定を超えたレポートを出す確率は私立大学の学生のほうが

イマティブアクション（積極的格差是正措置）への反発が起こりそうですが、たしかに推薦入試枠の拡大ならば自然と女性割合の増加が実現できそうですね。

上野 すでに大胆なAO入試を実施した大学の調査では、推薦枠の入学生のほうが一般人試で入った学生よりも在学中の成績の伸びしろが大きく、他の学生に好影響を与えていたそうです。たとえば、ある地方国立大学では推薦枠を総定員の四割に引き上げる方針を示すなど、他の大学は行動に移しています。ここで東大の入試制度が変われば、受験業界全体の改革が一気に進みますよ。

森本 大学入試を急速に変えているのがアメリカです。SATやACTなどの全米標準テストは、もはや多くの大学で任意もしくは実施していないようです。

上野 それは知りませんでした。アメリカはそこまできましたか。

森本 ジョン・オーブリー・ダグラスが著した『衡平な大学入試を求めて』（九州大学出版会）に詳細が書かれています。アメリカの入試改革を先導するUC（カリ

多い印象です。

森本 私も何年か非常勤で教えました。東大では「答えを間違える」ことを何としても避けようとする学生が目立ちました。間違えることで伸びるのに、それを恥ずかしいと思っているのです。上野先生が提案された入試制度を採用するならば、学生の伸びしろを見抜く教員力量も問われることになります。

教養を養うと寛容になれる

森本 教養といえば、昨今ではビジネスに役立たせるために、「コスパ」よく教養を得ようとする「ファスト教養」の風潮が広がっているようです。ずばり『ファスト教養』（レジー著、集英社新書）という本も話題になっていますが、著者はファスト教養に頼りたくなる心情に理解を示しながらも、流行する背景やその問題点について指摘していました。

よく「教養を身につける」といわれますが、そもそも

教養とは、アクセサリのように付けたり外したりするものではありません。ダイエットと同じで、一定の時間と労力をかけなければ結果は伴わないでしょう。

上野 「ファスト教養」と聞いて頭に浮かんだのが、私のゼミ出身の古市憲寿ふるいちのりとしさんが著した『10分で名著』講談社現代新書』です。古市さん本人は数多くの名著をしつかりと読んでいるし、「原典を読むべし」とのメッセージを本書で送っています。でも、出版社の本の売り方が「ファスト教養」に寄っているんですよ。大事なのは名著の情報や要点を知ることではなくて、そこらひかに自分の考えが揺さぶられたかでしょう。

森本 その通りですね。揺さぶられて、ノイズを知って、自分の考えを鍛え直す時間です。

上野 とはいえ、私だって何も表紙からあとがきまでの一字一句をすべて細かく読めと主張しているわけではありません。たとえば、まずは目次を開いて、気になる箇所をピンポイントで読む。そこで「おっ！」と思う内容だったら最初のページまで遡り、まえがきから最後まで

ージをめくることもできるでしょう。

上野 自分なりのアンテナを張ること、つまりオリジナルの問いを立てることがとても大切ですね。

森本 でもそんなことを言うと、一般的な学生からは「自分なりの軸なんてわかりません」と反論されてしまうかもしれません。

上野 誰しも、その人なりの原体験や当事者性は必ずあるはずです。たとえばゲイや在日の学生は、生育歴において多かれ少なかれ決定的な経験をしていることでしょう。またたとえ特別な境遇でなくとも、家族との関係や些細な出来事から自分を見つめ直すことはできます。私の場合は女性学に出合い、自分自身を研究の対象にしていいんだと目から鱗うろこが落ちて、学ぶ意欲が湧いたものです。

森本 教養が養われると、社会に批判的な考えをもつても、同時に寛容な態度をもつ人間になれるのです。攻撃的で歪いびつな形だった心が次第に矯ためられて、丸みを帯びてくるイメージでしょうか。まあそれでも、大学の先生

で通して読み進める。すると、自分の考えを揺さぶる素晴らしい本に年に何冊かは出会えますよ。

森本 私も学生に言っているのは、まずは自分でつかまえない魚に合わせて網あみを大きく投げろ、そして引っかかる場所があったら、そこを徹底的に読め、ということ。予測も期待もなしに漫然まんぜんと読むだけでは、何も引っかかりません。

あと、何冊読破したかという量ではなく、何回も読み直す本が一冊でも二冊でもあるほうがはるかに重要です。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』だって、学生時代と自分が親になってからとでは、読んだときの感じ方がまったく違うでしょう。

上野 そうですね。いまの私なら、「その恋愛は若気の至りだから、一回立ち止まって考えて」と忠告したくなりますし（笑）。

森本 それと、読み進めるうえで自分の軸が固まっていれば、「この著者の考えは私と合うな」「自分とは主義主張が違う書き手だな」などと、思考を巡らせながら

たちはいつも誰かと喧嘩けんかしているのですが（笑）。

上野 学者同士はたしかに仲が悪いですね（笑）。でも、いまの森本さんのお話は最高で、とっても大切です。私の言葉で言い換えれば、いろいろな研究をして教養を培つちかうと、本当の「敵」が何かがわかってきます。女性学は、旧態依然とした家父長制を批判してきましたが、その仕組みや弱みを知ると、理解と同時に同情ができるようになります。

森本 オッサンたちも大変なんだと。「ざんねないきもの」みたいに（笑）。

上野 相手の事情を理解できれば、寛容になってむやみと攻撃しなくて済むようになります。自分と対立する立場にも思いを馳はせられる。やはりリベラリズムとは、最後には寛容と結びつくのだとしみじみ感じ入りました。

森本 素晴らしい結論です。今回は「上野千鶴子劇場」を存分に堪能たんのうさせてもらいました。ありがとうございます。